

書評

重信幸彦著

『みんなで戦争 銃後美談と動員のフォークロア』

伊藤 龍平

三浦俊介氏の方法は、あることがらに目を着けながら、そこからさまざまな方向へと射程を伸ばし、周縁を巡りながら話題を広げてゆくなかで、主題に目星を付けてゆくという方法をとろうとする。おそらくそれは、著者の該博な知識のなせる技だと思ふのだが、その広がりがある場合にはどこに連れて行かれるのかわからなくなり、著者の主張を見えにくくしてしまうことにもなる。むろん、それはこちらの知識不足によって著者に付いていけないだけのことであり、本書が述べようとしていることがらに抜かりはない。ただ、貴船神社と貴船にかかわる神話や物語を対象にして一書を編むということであれば、第Ⅱ部に置かれるべき論考に関しては、今一段の工夫があるとはよかつたのではないか。それはおそらく「序説」という語が外された次の著作に期待すべきことかもしれないのだが。

二〇一九年六月 思文閣出版刊

本体一〇〇〇円

(みうら・すけゆき／東京都)

重信幸彦という名前が世に出たのは、最初はジャン・ハロルド・ブルンヴァン『消えるヒッチハイカー』（一九八八年、新宿書房）の訳者の一人として、次に論文「世間話」再考——方法としての「世間話」へ（『日本民俗学』一八〇号、一九八九年）の著者として、である。柳田國男が没して四半世紀、従来の研究メソッドが通用しなくなりつつあり、新しい民俗学の方向性が模索されていたころ、少壮の重信は、世間話研究の旗手として世に現れた。私が重信の名を知ったのは大学進学後の一九九二年だが、その時代の「空気」は充分に感じられた。この「空気」という語こそが、本書のテーマとなっている。

ハナシの場には、それぞれに特有の「空気」がある。笑話には笑話の、怪談には怪談の、哀話には哀話に特有の「空気」があり、話し手も聞き手もその「空気」によって話す／聞くモードを決定づけられる。上手な話し手は、巧みにその場の「空気」をつかみ、さらには「空気」を作る。聞き手も、場の「空気」を読み、敏感に「空気」に反応する。その「空気」は時代によって作られることもある。時代の「空気」は日常に存在するものだが、「空気」の譬えどおりに、平素はさほど意識されない。それが強く意識されるのは非常時においてだ。本書のテーマである銃後美談も、総力戦という非常時の「空気」の中で生まれた。

先述したように、重信の研究歴は、世間話への眼差しから始まった。一口に世間話の研究といっても、「世間」の研究に傾く人と「話」の研究に傾く人がいる。一長一短

があると思うが、重信は間違いなく前者だった。『タクシー モダン東京民俗誌』（一九九九年、日本エディタースクール出版部）、『お話』と家庭の近代』（二〇〇三年、久山社）、そして本書にいたるまで、重信は、話を成り立たせている「世間」について考え続けていたように思う。この場合の「世間」は「空気」によって育まれるものだ。

本書には、いわゆる口承資料は挙げられていないが、論の根底にあるのは、世間話研究で培われた見識である。そのことは「あとがき」で提示された民俗学の定義——「聞き書き」という実践を基本として

いることから、広い意味での「お話」と向き合う学問」に明らかだ。本稿では以上の点を踏まえつつ、『口承文芸研究』という雑誌に引きつけて同書を評してみたい。「内の言は、本書からの引用。

序章「美談の読み方——からみつくつながらりと銃後」において、重信は「美談」を「近代的歴史学が管理してきた「歴史」とは別次元の歴史語りの実践のなかで、受け手が一つの規範として受け取ることを前提に過去の事績を語る際に使われた歴史を指示

する概念」と定義づけている。近代以降の出版物が想定されているが、普遍性を有した定義である。そのうえで、「ことさらに美談の裏側やその陰に隠蔽された事実を暴くのではなく、美談が語っていることそのものを読み取ること」で「現れた「総力戦の制度の矛盾や、銃後の暮らしのなかの人々の関係性のあり方」を読む態度が選び取られた。ここで、歴史家カルロ・ギンズブルグ

の「歴史を逆なでに読む」手法が用いられている。この手つきは「美談」というナイーブな言説と向き合うのに効果的で、本書を通じて一貫している。

本章は、二部構成を取っている。第一部は総論で、第1章「銃後美談集を編む」、第2章「銃後美談と活字メディア」、第3章「増殖する銃後美談」の三章を載せ、「銃後の地域のつながりの実践をめぐる美談」が論じられている。第2部は各論で、第4章「応召する男たちをめぐる」、第5章「納豆を売る子どもたち」、第6章「妻そして母たちの銃後」、第7章「モダンガールと少女たちの銃後」、第8章「もう一つの銃後」を

載せ、「地域のつながりのなかの善意や使命

感が特定の応召者や家族を縛っていく具体例」が論じられている。各章は緊密に連携して、重層的な読みを促している。

第1部の冒頭を飾る第1章「銃後美談集を編む」では、「総力戦の仕組みが具体的に整えられ」、「銃後の制度」も整えられていた日中戦争期において、数多の銃後美談集が、一過性の「国民の高揚」を持続させるための「仕掛け」として編まれたことが述べられる。その際、当局が、銃後美談には「動員の制度がはらむ都合な現実を露呈させてしまう危険性があることを、よく認識していた」という指摘は、美談の本質を

考えるうえで重要である。美談の主人公の英雄的行為は「それを不可避にし、人を苦境に追い込んでいく何らかの要因」とセツトで語らなければ成立しないものだからだ。例として、本章では「相互扶助を断る」

美談が挙げられている。戦後という「空気が」の中で生きるわれわれは、ともすれば、美談を当時の為政者のご都合主義で創られたものかと思いがちなので、この点には留意しておきたい。

続く第2章「銃後美談と活字メディア」

では、絵本や新聞などの各種活字メディアに載った美談について論じられている。「武勇」の描かれ方を六つに分類して考察しているのは、モチーフ論を援用したもので、重信の説話研究者としての出自を思わせる。とくに「戦闘する身体の語り方」、「過去の武勇の美談の再話・言及」について論じた箇所は、軍記物などにおける類型表現の研究の蓄積と重なり合う。また、献金・献納美談の主人公が「朝鮮人、子ども、老人など社会的にみて周縁に位置する人々や、囚人という隔離されている人々、さらには、在留中国人という「敵国」の人たち」であるという指摘は、美談の文法について考えるうえで示唆的である。構造的に、美談は弱者・他者を創り出すのだ。美談の聞き手・読み手と弱者・他者の距離については、今後、重要な研究テーマとなるだろう。

そして第3章「増殖する銃後美談」では、当時のモダンズム文化の中に広く浸透していった美談について論じられている。「総動員制度を推進するため」ではなく、「気軽な読み物として消費され、場合によっては読み捨てにされる」美談群である。美談の主

人公の多くは実在する人物で、当然のことながら、本人やその家族たちの生活に影響を及ぼす。ここで例として挙げられているのは、山内中尉の母ヤスである。ヤスの手紙の文面から窺えるのは、「メディアによって自分の実像を超えたイメージが作られ、さらにそのイメージを社会が賛美し自分に好意を寄せた」ために、「それに応える言動をとるようになっていった」女性の姿である。善意の暴力性。このようにして「軍国の母」は生まれていった。重信は、ヤスの手紙の背後に、ご近所との人間関係を読み取っている。

ここから第2部に入る。第4章「応召する男たちをめぐって」では、「応召美談」、「出征美談」について論じられている。送る者と送られる者、そこにも世間の目はあった。また、応召が作り出す、戦時下の男性性についてもふれられている。美談とジェンダーの問題に気づかせてくれる章である。美談の内容が酷似している点については「国家が個人を対象化するという制度の共通性のために、こうした同一の「話型」ともいえるような美談が生み出されることになった」と述べられているが、「話型」という概念が有効なのはこのような場合である。「話型」を考えるのではなく「話型」で考える。この態度は第8章でより効果的に示されている。個々の挿話が「話型」として認識されたとき、個性ある顔を持つていた主人公は、無個性の人形になる。われわれが美談に不気味さを感じるのは、こういうときだろう。

銃後美談を多面的に捉えようとする本書では、美談と向き合った読者たちの多様性にも言及している。第5章「納豆を売る子どもたち」では、戦時下の子どもが作る「宍気」について論じられている。銃後美談にふれた子どもたちは「自らを主人公にして物語のなかの感動を再生産しよう」という模倣の欲望を持つようになる。それは、大人たちにとって迷惑だった場合もあるが、「銃後の後援という大義名分を背負っているのだ」という自意識をもった子どもたちの善意」は、戦時下特有の「宍気」を作り出す。大人たちの提供した美談によって作られた子どもたちの言行は、一方で、大人たちの言行を規制するものでもあった。「美

談は子どもたちの間に「感染」し増殖する」という箇所を読むと、子ども文化の中での噂の研究(例えば、「口裂け女」など)と、美談研究の意外な接点も見えてくる。

子どもとならんで、銃後美談で重要な役回りを演ずる女性については、第6章「妻そして母たちの銃後」で論じられている。「妻」「母」は銃後美談の「象徴」だった。これと対になるのは、戦地に赴く「夫」「息子」である。美談研究の本丸というべき問題だけあって、記述は詳細を極め、本書中の白眉というべき章である。重信は「家庭」という近代家族の理念」が構築されていく過程で、「良妻賢母」という概念が生まれたことを、前近代の事例と比較しながら説いている。その過程の中に、銃後美談があった。この点については、重信の『お話』と家庭の近代(前記)を併せて読むと、理解が深まるだろう。近代に生成した「家庭」が日本の伝統だという錯覚は、今日に至るまで続いている。「銃後」なきあとも、銃後美談のメンタリティーの一部は生き続けている。

第7章「モダンガールと少女たちの銃後」

では、戦時下の女性のうち、「妻」でも「母」でもない二つの極、「街頭」の女性たち」と「少女」について、先行研究(今田絵里子、若桑みどり等)に拠りながら、論じられている。前者はカフェなど「モダンな盛り場で働く女性たち」のことで、近代の都市文化の中で生まれた。後者は「女性としての中間的かつ過渡的な状況」のことで、やはり近代になって、立身出世の担い手となるべき「少年」が発見されていくのと同じ時に発見された存在である。重信は、戦地の兵士たちに手紙を書く少女たちを「チアリーダー」という語で捉え、ここに柳田の言う「妹の力」を見出している。「少女」はいずれ軍国の「妻」、「母」に転ずる存在であり、銃後美談におけるジェンダーのみならず、人生のステージにおける(話の中の)役割の変化を示唆していて興味深い。

第8章「もう一つの銃後」は、本書の掉尾を飾るにふさわしい好論で、説話研究者ならではのアプローチが見られる。出征美談に對置される、出征家族の犯罪。勇ましく出征する兵士の美談がある一方、残された家族が困窮のあまりに犯罪に走ることも

少なからずあった。重信の語を借りれば、「犯罪の話になるか美談になるかの違いは、ほんの紙一重」であり、「説話論の観点から言えば、第4章の美談とこれらの犯罪譚は、結末が異なっただけの類話といつてもいいだろう」ということになる。説話を研究するのではなく、説話で、研究する姿勢で、説話研究の可能性を示唆しているといえよう。銃後の美談も犯罪譚も、背景にあるのは地域の間関係が生み出す「空気」だった。そして、美談にも犯罪譚にもならなかった(すなわち、ハナシになる以前の)人々の苦しい日常があったことを忘れてはなるまい。

そして終章「動員と「弱さ」をめぐる」では、銃後美談から見えてくる「動員の状況ではたらく力」について論じられている。「はしがき」でもふれられているが、「動員」は現代でいう「ボランティア」に近く、自発性の強いものだったという。それは日常生活の中で「善意」という形で現れ、人々に絡みついていく。重信は、銃後美談の基本モチーフを、動員という状況の中で、何らかの「弱さ」を抱えた人たちが、それを

克服しようとするのだとしている。その「弱さ」は暴力的なものであった。とくに子どもについては「無敵の弱さ」と表現されている。ハナシである以上、銃後美談に描かれる人物は必然的に類型性を帯びているが、ここでも、垣間見られる個々の人生の有りように目が向けられる。「高度成長という「動員」の時代」の例が挙げられているように、これは現在のな問題であった。

本書で提示されているのが今日的な問題であることは、読者の誰もが感ずるところであろう。戦争から遠ざかっている現代日本でも、有事において美談が生まれることは、「はしがき」でふれられている東日本大震災の際の「動員」の様子から明らかだ。あの震災に限らず、災害時に形成される美談は、理想的な被災者のふるまいを要求し、さらには、その言説に対する受け手のふるまいを規定する。今日でも、美談は人々の心の動きを束縛する。

例えば、「動員」の状況はあらゆる国にあっただろうし（今でもあるだろう）、そこには数多の「銃後」があり、数多の「美談」が生まれてきた（生まれている）だろ

う。さまざまな国の、さまざまな民族の歴史の中でこの問題について考えるのは、単なる説話研究上の意味以上の価値がある。国際比較が必要とされるのは、まさにこうした場合だろう。

さらに話題を敷衍すると、時代の「空気が作り出すハナシは、美談に限らない。例えば、終戦直後、高度経済成長期、バブル景気時代、平成不況……と、それぞれの時代に特有の「空気」があり、その「空気」の中でハナシがあった。戦前と戦後ほど明確ではないにせよ、それらの時代の只中であつたハナシを、現在を生きるわれわれが受け止めたとき、確実に認識の相違が見られる。各時代のハナシとの向き合い方を考えると、本書の示した態度は一つの示唆を与えるだろう。

以下、本書を読んで不足に感じた点を二つ、今後の課題として挙げてみたい。

一つ目は、植民地への視線がほとんど見られないこと。近代日本にとって、植民地（台湾、朝鮮、満洲など）は不可欠な存在だった。そして植民地では徴兵制の実施が遅れ、現地住民全体が「銃後」に置かれて

いたことを思えば、この点への言及はあつてしかるべきだと思う。また、アイヌなど、マイノリティーへの言及が少ないことも気になった。

二つ目は、「銃後」の多様性について、もっと取り上げるべきだったのではないだろうか。たしかに、女性（妻・母・少女）、子どもなど、いくつもの「銃後」が取り上げられているものの、やや一面的な気がする。「銃後」を支えた妻、母、少女、子どもたちについては、さらなる分類が可能ではないだろうか。

以上に挙げた点は、本書へというより、むしろ後学の者への課題として受け止めた。優れた著作は得てして完結せず、開かれた謎を残して読者の前に立ち現れる。

なお、本書は書き下ろしに近く、これまでの重信の美談研究をまとめたものではない。是非とも、未収録論文を一書として読みたいというのが、一読者としての思いである。

二〇一九年三月 青弓社刊

本体三二〇〇円

（いとう・りょうへい／南台科技大學）